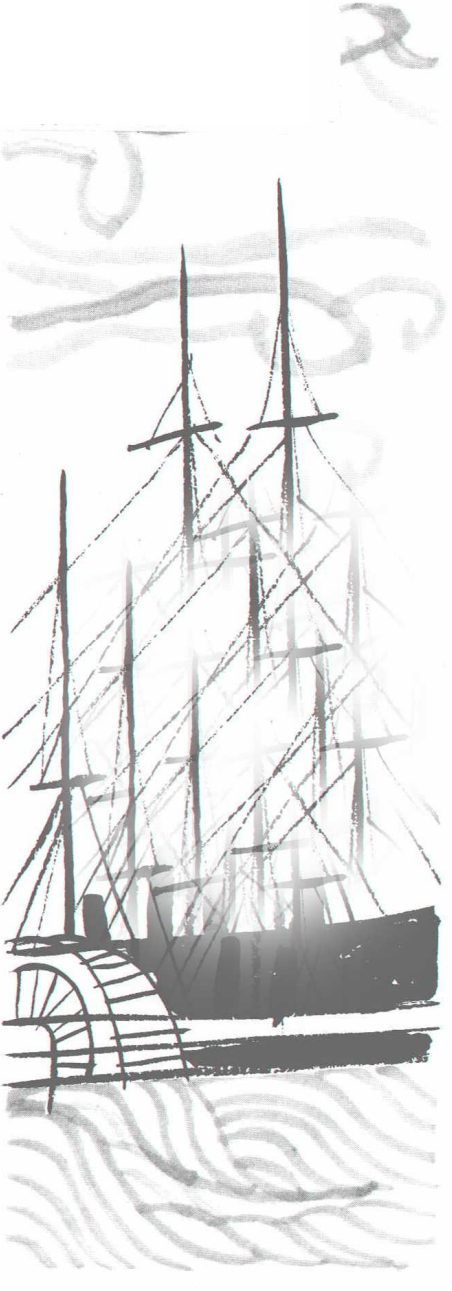

幕末創世記（上）

邦光史郎

河出書房新社

幕末創世記（上）
©1974
昭和四十九年三月二十日　初版印刷
昭和四十九年三月三十日　初版発行
著者　邦光史郎
発行者　中島隆之
発行所　河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三―六
電話東京（03）二九二―三七一一
振替　東京一〇八〇二
乱丁・落丁本はおとりかえいたします
定価はカバー・帯に表示してあります
印刷・中央精版印刷　製本・中央精版印刷

目次

閉ざされた東洋　5
指月城　33
白面の書生　61
順風逆風　90
黒船来航　118
猛士　158
海鳴りの時　188
異人たち　216
唐人お吉　243
激しかるらん　272
直弼登場　300

裘幀　御正　伸

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

幕末創世記

（上）

閉ざされた東洋

一

ロンドンを船出したテイ・クリッパー（支那茶を運ぶ快速帆船）が、約五ヵ月の航海を終えて、ようやく澳門へたどり着いた時、ハリー・パークスは、水夫の背に負われて下船しなければならないほど、すっかり衰弱しきっていた。

「坊や、あれが、あんたのお城だよ」

水夫は広い肩を揺り上げて、ハリー少年の閉じた瞼を開かせようとした。

本船にいた時は、さほどに思わなかったけれど、こうして小さなボートに移乗してみると、港はかなり波立っていて、うねりが高い。

その波頭の向こうに緑の島影が揺れ、海岸線に並ぶ白い館の群れが、まるで遠くに浮かぶ蜃気楼のごとくぼんやりと映り、それはすぐ砕け散る波のしぶきにぼかされて、ハリーはまたしても激しい嘔吐感に悩まされた。

——吐くものなど、もう何も残ってやしないのに……。

少年は呪わし気に呟いた。すると、自分の胃袋は、きっとイングランドへ帰りたがって、こんな手ひどい抵抗を試みているのだろうという思いがよぎった。

——だけど、もう駄目なんだ。みんな死んじまって、僕に残された親族は、この澳門に住んでいるチャールス小父さんだけなんだもの。

だがその人は、従姉のハズバンドであるにすぎない。けれどハリーは、その薄い縁を頼る以外にしかたのない身の上となってしまった。

目をとじると、夕陽の街道を駆けて行く馬車の鈴音が聞こえてくるようだった。そしてその馭者台には、元気だった頃の祖父がどっしりと腰を下している。

〝お爺さん、どうして夕陽に向かって旅をするの〟

問いかけると、祖父は、煙草の匂いのしみた濃い髯をもぐもぐさせた。

〝坊や、西へ向かって旅立つと、すこしでも長生きできるからだよ〟

その時、祖父はすでに迫りくる死の予兆を恐らく感じ取っていたのだろう。

——みんないつかは死んで行かなきゃならないんだ。

馬車に揺られつつ、ハリーはこれからはじまるだろう旅の愁いに身を委ねていた。

「さア着いたぞ坊や！」

鉄の爪のように硬い水夫の指先が、少年のやつれきった身体を、自分の背中から引き剝がそうとした。
目を開くと、波止場に群れ集っている異相異形の男女たちが、名も知れぬ小鳥の囀りのように甲高い声を上げて、今上陸しようとする紅毛人たちを見物している。
——まるでサーカスの一座が着いたようだ。
にわかに熱気が彼らを押し包んだ。
「これが澳門なの……」
少年は怯えた声を放った。
「そうさ、これがわれわれ白人のお城だ」
けれど少年の目に映った波止場は、黒や麻色の短い上衣に、同色のだぶだぶしたズボンを穿いた、黒髪黄色の膚をもつ支那人たちによって埋めつくされている。
「さあ下りなよ。モンテの砦で、ポルトガル兵たちが歓迎の大砲を射ってくれることだろう」
水夫たちは、路傍に佇んだり榕樹の木蔭に坐り込んだりしている東洋人たちを、まるで足許に群がる猿の群れを視るように、傲然と見下している。
——これがあの美しい島の住民たちなのだろうか。
立ちながら西瓜を齧って種子を吐き散らしている男たち、ぶんぶんとび廻る蠅が赤児の顔に群がりたかっているのに追い払いもせず、裸の子供が他人の足許に向かって小便をとばしているのに、それを叱ろうともしない母親や、弁髪を垂らしながら、水夫の捨てた煙草を群がり争って奪い合っている大人や子供たち、それらはどう見ても未開の国の粗野としか思えなかった。
——なんてひどい所なんだろう。
それにこの暑さはどうだろう。風も土もからからに乾ききって、しかもべっとりと塩分を沁み込ませたように暑い。汗が、全身から噴き出して、たらたらと眉にしたたり、眼が痛んでならない。ハリー・パークスは、いつか船酔いより、炎熱を苦痛としている自分の変化に気づいた。
——なるほど、船酔いの妙薬は大地を踏むことだと聞いていたけど、こんどはこの暑さを防ぐ妙薬を教えてもらわなきゃいけないな……。
五ヵ月にわたる苦痛の航海は、ハリー少年に衰弱を与えたばかりでなく、計り知れないほど多くの知恵をも与えてくれたようである。
とにかく彼は、自分ひとりの才覚で、この広い世界を渡って行かなくてはならないのだ。
——これからは、一日も早くここの生活に慣れなきゃいけないぞ。
ハリーは、赤い煉瓦を積み上げたばかりの茅屋が、うすぐらい室内をのぞかせている海岸通りの支那人街を眺めやった。
大きな竹籠に、海老や蟹や名も知れない魚たちが山積みさ

れて路傍に並べられ、その死魚の腐臭を慕って、蠅たちがぶんぶんとび廻っている。だが支那人たちはその悪臭をさして苦痛としていないようだった。

——正しく未開国だ。

ハリーたちの一行は、石造りの家々が建ち並ぶ港町をくぐり抜け、やがて爪先上がりに島の中央部へとつづいて行く石畳道にさしかかった。

「坊や、お前の小父さんは偉い牧師さんなんだってな」

「ええ、イギリス政府の主席通訳です」

ハリーは胸を張ってそう答えた。

「そうかい、この東洋じゃ、牧師さんは、みんな通訳兼スパイをしているよ」

「いいえ、チャールス小父さんは支那学者なんです」

「学者か……。支那語を覚えさえすりゃ、みんな学者だよ」

水夫たちは高声を上げて笑い合っている。

だが、ハリーは、この異境にあっても紳士でありたいと願っていた。

——この水夫たちに小父さんの志がわかってたまるものか。

けれど、ハリー・パークスが、これから頼って行こうとするチャールス・グッラフは、〝山師〟と仇名されていた。

一八三〇年代、まだ香港は無名の海賊島にすぎず、上海もまた開港の運びに至らず、当時最大の貿易港となっていたのは、支那人がオーモンと呼んでいる澳門、そして広東の二港であった。そのため一攫千金を夢見る紅毛の山師たちが、この澳門に群れ集まってとぐろを巻いていた。

ところでドイツ生まれのイギリス人チャールス・グッラフは、あまりにも野心がありすぎた。彼は、アメリカ海外宣教団の布教師となってこの澳門へやってくると、たちまち支那語をマスターして、新約聖書の支那語訳に成功した。

そこでイギリス政府は、当時支那学の最高権威者であったロバート・モリソン博士に次ぐものと認めて、チャールスを、商務庁の主席通訳に任じて、支那大陸侵略の水先案内人にしようとした。

彼らヨーロッパ人は、これから侵略しようとする国に、まず宣教師を送り込んで情報の蒐集と宣伝に当たらせ、次に商人を派遣して交易に名を借りた経済侵略を策し、さて最後に軍艦が現われて完全に征服を完了するという三段構えの植民地獲得戦略を用いている。

そのよい例がイギリスのインド支配である。当時いち早く産業革命を為し遂げて資本主義国化していたイギリスは、七つの海を支配してインドに至り、そのインドから取り立てた税金と綿花を使って大量の綿布を生産した。ところが生産が増大すれば、その売先が必要となってくる。そこで目をつけたのが、四億の厖大な人口を抱えている支那大陸であった。

イギリスは、他国と争って支那茶を買いつけていたけれど、その輸入代金を、過剰生産になっていた綿布を売りつけることによって相殺しようとした。

ところが、いくら人のよい北京政府だってそうは思い通りになってくれない。そのため、イギリス人が考えついたことは、インド特産の阿片を支那人に売りつけて、彼らを骨抜きにしてしまうことだった。

阿片の害毒の恐ろしさは、誰よりもよくイギリス人が知っている。だからイギリス本国では阿片の持込みを国法によって固く禁じている。けれど東洋人に売りつけることは一向に構わないとばかり、牧師たちを麻薬売込みの手先に使っていた。

大体、他人の国へずかずかと踏み込んできて、お前たちの宗教は異教であるからキリスト教に改宗しろと迫ることさえ怪しからぬ神の押しつけであるにも拘わらず、こんどは麻薬の押売りを強行しようというのである。

こうして起こったのが、後の阿片戦争であった。

だが、イギリス政府の高等スパイであるチャールス・グッラフは、支那よりも、まだ極東に位置している金銀の島日本により深い興味を抱いていた。

二

マルコポーロの東遊以来、日本は、黄金の島として印象され、ケンペルの〝日本史〟（一七二七年刊）や、シーボルトの〝日本〟（一八三二年刊）によって、ようやく日本研究の機運が起こりつつあったとは言え、彼らヨーロッパ人にとって、この鎖国された極東の島国日本は、まだまだ神秘の帷に閉ざされた未知の国でしかなかった。

――だから、その神秘なる処女性を、儂が、この手で押し披いてみせてやる。

そうすれば、チャールス・グッラフの名声は、ロバート・モリソンを遥かに凌駕して、彼の名は必ず歴史の一ページに長く記録されることだろう。

チャールスは、日蔭になったバルコンに憩っていた。目を上げると、紺青の空と紺碧の海がある。

そしてこの邸には、日本渡航の名目となるべき七人の日本人漂流者たちが養われていた。彼らは、大君に捧げる貴重な手土産なのだ。

これですべて日本探検の準備はととのった。この後は、日本へ渡航する船主をみつけさえすればよい。そうすれば金銀の島を思うままに料理できる。

――だが、それにしても、この澳門の炎熱は、ともすると勇気あるイギリス人を、怠惰に変えてしまいやすい。

チャールスは、午睡の時をすごしている静かな邸内の気配に耳を傾けようとした。

――みんな今のうちにたっぷり休養を摂っておくがよい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

それにしても、ハリー少年は午睡もせずに部屋を抜け出して何をしているのだろう。

彼は、ハリーに対して一つの夢をもっていた。それは、剛毅なる精神と強健なる肉体を併せもつイギリス少年を、自分の後継者に仕立て上げることだった。

——だが、あの子は、思ったより脾弱すぎるようだ。

それだけがわずかな不満であった。

どこからか胡弓を弾いているらしい音色が流れてきた。けだるく単調なリズムであった。

ハリー・パークスは、日本人漂流者たちが寝起きしている小さな茅屋を覗き見た。外見上、彼らは支那人たちとよく似ている。けれど、支那人のように楽天的ではなかった。深い皺をその陽灼けした顔面に刻み込んで、どこか悲劇的な印象を漂わせている。

壁に取りつけられた木製の三段ベッドに横たわっていた彼らの一人が、ゆっくり頭を擡げてハリーを瞪め直した。

「カム・ヒヤア……」

男は、口ごもった発音でそう呼びかけた。

一歩、室内へ入りかけて、ハリーは、あわてて背を向けた。

——なぜ……。彼らが奴隷だから自分は入ることをためらったのだろうか。

ハリーは、まだ東洋人にすこしも馴染めなかった。この澳門へきて、もう十日も経つというのに、邸内からまだ一度も外へ出たことがなかった。

今、彼は、その禁断の門をくぐり抜けようとした。

夾竹桃が、丈高く生い茂っていた。風のない午後であった。音もなく赤犬がすり寄ってきた。まだ成犬とはいえないやせたからだに、肋骨が浮き上がっている。インド人のボーイの話によると、その犬は十日ほど前にこの邸へ迷い込んできて、いくら追っても出て行こうとしないのだそうである。

「ドーラ……」

ハリーは手をさし伸べた。支那風に〝竜号〟と名づけたけれど、彼は愛情をこめて〝ドーラ〟と呼ぶことにしていた。ドーラは、ハリーに従って坂道を下りて行った。

どこからか、不思議な音色が聞こえてくる。バイオリンのようであってもっと東洋的な音色であった。むせび泣く女声に似て甲高く、あるいは嫋々と流れるようにひめやかでもある。

——ここだな。

赤煉瓦の壁の上に、鎧窓が穿たれて、音色はそのあたりから、どこまでも青く晴れ渡った虚空に向かって流れ出ている。しばらく佇んで眺めていると、そのおぐらい窓に人影がゆらめき出てきた。

白く可憐な面輪の少女であった。彼女は、はかなげに細い首を傾げて、路上を眺めやろうとしている。

ドーラが、二声、三声吠え立てた。
「ドーラ！」
急いでハリーは犬を制した。少女は、怯えたように首をすくめている。
「すみません、何しろ行儀の悪い犬でして…」
思わずハリーは英語でそう言った。すると、少女は、
「いいえ、構わないんです。私、犬は大好きなんです」
やや訛のある英語で答えた。
「あなたは、英語がお上手なんですね！」
ハリーは、思いがけない事実に、すっかり昂奮してしまっていた。
「ええ、ほんのすこしだけ……。でも、その犬は、英語が話せないようね」
「そうなんです。何しろ〝竜号〟ですから……」
「どんな犬だか、見たいわ」
「下りてらっしゃいよ。ドーラは、咬みついたりしませんから……」
それは心からの誘いであった。もう何日間も、いや何十日もの間、このようにやさしい女性と会話を交したことがなかった。まるであの人は、隣家のマーガレットのようだ。ハリーは胸が弾んでいた。
けれど、少女は、なかなか姿を現わさない。気が変わって、もう下りてこないのだろうかと心が萎えた。

突然、木製の白い扉が、かたりと鳴った。振り返ると、そこに赤い旗袍をまとった少女が佇んでいた。年齢はよくわからない。小柄でほっそりとしたからだ、きれいに編んだ長い髪、夕顔のように可憐ではあるがはかなげな面輪、そして小さく朱を点じたような唇が、かすかに開いているが、その双眸は、閉じたままであった。
「お日様が、目に痛いわ」
黒く長い睫毛が、蝶の翅のようにふるえを帯びていた。
「あなたは、目を患っているんですか」
だからおりてくるのにこんなに暇取ったのだなと思った。
「ええ、目は見えません。でも、その方がいいんです。醜い物を何一つ見なくてすみますから……」
微笑しようとして、少女は憂いを浮かべてしまった。

三

やがてハリー・パークスは、その赤い煉瓦の館に、三人の若い娘たちが住んでいることを知った。けれど奇怪なことに、三人の娘たちは、すべて盲目であった。
――姉妹かしら。
はじめはそう思ったけれど、三人とも全盲の姉妹が生まれるなどあり得ないことである。それにその館の女主人は、彼女たちの母親ではなく、雇い主であることがわかった。
――一体、あの娘たちは、何なのだろう。

この方一里余りの緑の小島澳門が、ハリー少年には、東洋の神秘を覗き見る小窓のように思えてならない。
――同じ人間でありながら、どうしてこうも西と東で違っているのだろうか。
自分たちヨーロッパ人は、この島を澳門と呼んでいるが、支那人たちは澳門と称している。
それには訳があって、ハリー少年にはわからないことであったけれど、最初、ポルトガル人がこの島へやってきた時、たまたま、そこに航海の神〝天后元君〟を祀る媽閣廟があった。そこで、ポルトガル人が、〝ここはどこだ〟とたずねた時、土地の人は〝マカオです〟と答え、それがこの島の地名となってしまったものなのだ。このように異人種間の聞き違い、行き違いは無数にあることだろう。
とかく人間関係というものは、お互いの誤解の上に成り立っている。まして、国と国、民族と民族の間に、誤解のあるのはむしろ当然のことかもしれない。
だが、ハリーは、出来るだけそのような偏見をもつまいとした。
――いずれ、僕は、この国に骨を埋めなきゃならない身の上なんだもの。
出来るだけ早くこの国に同化して行きたい。ハリーはそう願っていた。
けれど、彼をこの澳門の邸に引き取ってくれた従姉の良人チャールス・グッラフは、そんな彼に外出を禁じようとした。
「この国には、まだ野蛮な風習が沢山残っている」
だから、その風習を嫌って、故郷へ帰りたいと言い出さぬよう、当分は、ハリーを隔離して置こうというのであった。
「それから、あの小屋に住まわせてある日本人たちにもあまり近寄らん方がいいだろうね」
では一体、誰とつき合えというのだろう。そう抗議したいと思った。
ハリー少年には、知りたいことがいっぱいあった。そこで、折りしも、あの聞く者の胸を掻きむしらずにはおかない胡弓の音色のひびいてくる午後、この男だけは接触することを許されているインド人のボーイを呼び寄せて、それとなくこうたずねてみた。
「ねえ君、この邸を出て、すこし坂を下って行くと、赤い煉瓦の家があるだろう」
するとインド人のボーイは、やや驚いた声を張って、答めるような口吻になっていた。
「もう、あんなところへいらっしゃったのですか」
――しまった。この男は、チャールス小父さんに告げ口をするつもりだな。
けれど、いったん口から滑り出てしまった言葉を、元へ戻す訳には行かない。
「いや、散歩のついでに、ちょっとのぞいただけなんだ」

「それならよろしいです」
「それならって、何かあるのかい」
「いえ、何もありませんよ」
だが、そう隠し立てすることが、一層怪しく思えてならない。
「たしか、あの家には盲目の姉妹が住んでいたはずだね」
ハリーはちょっと鎌をかけてみた。
「盲目の姉妹って、あれは盲妹ですよ」
「盲妹？　なんだい、それは……」
「盲目の女のことですよ。しかし、あまりそういうことに興味をお持ちになるものじゃありませんよ」
「なぜ、持っちゃいけないんだろう」
「紳士はあまり口にしない方がよろしいからです。それより、ドーラを鎖につないでおかないと、今に食べられてしまいますよ」
「食べられる？　まさか。それともこの国じゃ犬を食用にするとでも言うのかい」
もうこの男をあまり信用するまいと思った。
するとインド人のボーイは、すっかりむきになってしまった。
「おや、この私が嘘をつくとでも言うんですか。よろしゅうございます。もしそうお思いなら、私についていらっしゃい」
「いや、駄目だよ。僕は邸を出ることを禁じられているんだ」
「大丈夫です。私といっしょなら、御主人に知れやしません。それとも、そんなに臆病でいらっしゃるのですか」
ハリーはその一言に反発した。
「臆病だってかい。よし、それならどこへでもついて行ってやる。僕は臆病者なんかじゃない」
勇気のない人間を、イギリス紳士と呼びはしないものである。ハリーは、このインド人に自分の勇気を示してやりたかった。それに、ハリー少年は、〝私は目が見えないために、醜い物を見なくてすむのです〟と言っていたあの盲目の少女がどうしても忘れられなかった。
その日も澳門（マカオ）の空は、熱しきった太陽を抱き込んで、今にも焼け落ちてしまいそうなほど暑かった。そして、眺め下す屋根屋根の向こうに、陽光を弾いて光る鏡面のような南の海がうねっている。
――すべては、海からやってきて、海へ去って行く。
ハリー少年は、この海のはるか彼方に、イングランドがあるのだと想った。
だが、彼は、勇気あるイギリス人になるため、そんな女々（めめ）しさを振り捨てなくてはならないと思った。
〝ハリーよ、わしはもう二度とヨーロッパへ帰らぬつもりだ。この閉ざされた東洋を、われわれの手で開化するまでは

な〟

チャールス・グッラフは、そう告げることによって少年に一つの覚悟を授けようとしたのだろう。

——だが、この東洋は、果たして未開国なのだろうか。

たしかに、ヨーロッパの文化とは異質のものがある。けれど、それはただ単に風俗習慣の違いだけではないのだろうか。ハリーは、直感的にそう疑っている。それに、この東洋の国々を西欧化することが、果たしてこの国の人たちを幸福にする道なのだろうか。そんな疑問も湧いてくる。

彼は、あの盲目の少女たちが住んでいる館の前を通りすぎようとして、思わず二階の窓へ視線を走らせてしまった。

——閉まっている。

あの閉じた窓の中に、一体どんな東洋の神秘が詰まっているのだろうかと想った。

「何しろこの家は、夜にならなきゃ、用のない所ですからね」

インド人は、謎めいたことを言った。

そして、なおも石畳の坂道を下って行くと、いつの間にかつい足許の小溝に家鴨の雛たちがやってきた。やかましく啼き立てつつ、彼らは、われ勝ちに先を争って、どんどん小溝を下って行く。

——どこへ行くつもりなのだろう。

しかし、彼らはきっと餌の在処を知っているにちがいない。

そういうと、なんだか香ばしい匂いがしはじめたようである。

四

〝ここですよ！〟と言わんばかりに、インド人は、足を止めて、顎をしゃくってみせた。

赤い屋根と赤い柱をもつ小さな茅屋であった。その薄暗い軒先に、何やら白いものが、だらりと吊るされている。

ハリーは、恐る恐るさし覗いた。

前肢を、あたかもちんちんしているかのように軽く持ち上げて折り曲げ、その首を縄で絞められて、そのまま軒先に吊るされた犬の死骸、さも怨めし気なその姿を一目見るなり、ハリーは、思わず飛び退いてしまった。

「こわいんですか」

インド人は黒い顔に皓い歯をのぞかせている。

内部から、主人らしい男が、揉手をしつつ現われて、何やら言っている。きっと、やアいらっしゃい、おいしい犬肉をさし上げましょうとでも言っているのだろう。男は、サービスのつもりで、ハリーたちを裏庭へ誘ってくれた。

そこに、たった今、首に縄をかけられたばかりの仔犬が鳴き叫んでいた。

「助けてやって……」

ハリーは思わずインド人の胸に取りすがった。

「もう駄目ですよ。いったん縄をかけられた以上、決して元通りにはならんのです」
「だって、こんなひどいことを……」
だが、その間に、もう仔犬のからだは、木の枝にかけられてしまっている。鳴声も弱まり、時折、はね上がろうとしてもがきつつ、やがて、赤い舌が口を割ってはみ出し、仔犬はぐったりと死の色を浮かべはじめた。
料理人は、これでさあ良しと言わんばかりに、今は息絶えた仔犬のからだを、左手にぶら下げて、煮えくり返る湯の中に、ざぶりと潰けた。
そして、真っ赤になって引き上げられた犬の体毛を、巧みな小刀さばきで、みるみるうちに削ぎ取り、こんどは、慣れた手つきで、腹を割こうとしている。
「もう沢山だよ」
泣き顔を見せまいとして、ハリーは走り出した。
その背中に、歌声がひびいてきた。
「僕独、僕独、焼狗肉、狗肉香……」
謡っているのはまだ八歳になるまいと思われる童女であった。その歌の大意は、コトコト煮える犬の肉、なんてまあ犬の肉はいい匂いなんでしょう、と、いかにも涎を垂らして待つ子供の気持をそのまま詠じているようだった。
けれどハリーは、今にも張り裂けそうな憤りと悲しみに胸をふさがれている。
――なんて国なんだろう。
もう東洋なんて、まっぴらだと思った。
だが、煮られる狗の運命より、まだ悲しい女の物語を、ハリーはやがて知らされた。
それは、あの赤い煉瓦館の盲妹、氷心の身の上であった。
その夜、ハリーは、こっそり邸を抜け出して行った。まだ昼間の余熱がどんよりと残っているとみえて、澳門の夜は、赤らんだような火照りを漂わせている。
――もうこうなったら、どんな酷いことだって平気で眺めてやるぞ。
その時は、そう思っていた。そしてインド人の言っていた、昼間は用のないあの館が一体どんな所であるか、おぼろ気に察しがつくような気がした。
けれど、あの盲目の少女が、そんないかがわしい稼業をしているなどと、信じたくはなかった。それに盲目の身で、そんな客席の勤めの出来ようはずがない。
彼は、楊柳の木蔭に身を忍ばせつつ、背伸びして開いた窓の内側を覗き見ようとした。すると聞き覚えのある声が洩れてきた。
「もう大丈夫だ。キング氏が乗り出した以上はな……」
「うん、あの人は、オリファント社の重役だものな」
「そのとおりだ。オリファント商会が動くとなると、もう船の心配も、積荷の手配も、何一つ気にかけることはあるまい」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com